

## 一人ひとりを大切にした表現活動 その2

### ～文京幼稚園における表現活動の実践～

宮内 太一\*・益田 薫子\*・大勝 愛\*・坂本絵梨子\*

入江沙耶佳\*・横溝 文\*・岡泉 英子\*・室井眞紀子\*

田中 香織\*・中辻 梢\*

Key Words : 幼稚園, 表現活動, 子ども劇場, オペレッタ, 劇ごっこ

#### I 章. はじめに

人間学部研究紀要 第10巻(2008年)では、文京幼稚園における表現活動の実践について、園行事「子ども劇場」を取り上げた。具体的には平成19年度の3歳児学年と4歳児学年が事例を取り上げ、その実践について検討した。

今年度は引き続き、平成19年度の5歳児学年の実践例をもとに幼児期における表現活動のあり方について検討する。

#### II 章. 5歳児学年の実践

##### 1. 平成19年度の学年運営の留意点

3年間の集大成とも言える5歳児学年の子ども劇場の活動に触れる前に、まず5歳児学年1年間の保育運営で心がけてきたことを述べようと思う。

4歳児学年、5歳児学年進級時にクラス替えを経験している子どもたちは、他クラスの子ともとも交流することが多い。また、5歳児学年では学年全員で園外活動、冒険旅行、園内を大々的に使ったお店やさんごっこなど5歳児学年ならではの活動も多い。保育者の願いとして、ク

---

\* 文京学院大学文京幼稚園

ラスの枠にとらわれず、5歳児学年61名全員が一丸となって園生活を築いてほしいと思っていたため、新しい歌の導入から園外活動の導入、冒険旅行に向けての話し合い、クッキングなど多くの活動を2クラス合同活動で行った。また、日頃から各担任保育者も互いの保育室に出入りし、子どもたちとかわるようになり、担任以外の保育者と共に活動をする機会も多く設けたりした。保育者間では現在の子どもの様子や問題点などを常に伝え合ったり話し合ったりすることを心がけ、保育者自身もクラスにこだわることなく5歳児学年61名全員のことを把握するように心がけた。

3歳児学年、4歳児学年と2年間子ども劇場を経験している子どもたちは、2月に「子ども劇場」という行事があることをよく知っている。また、その時の5歳児の姿に憧れを持ち、自分たちもあのようにになりたいと思う子どもも少なくない。そのような中、保育者の選んだ既成のストーリーに子どもたちをはめ込んでいくのではなく、子どもたち自身が好み、何かしら自主的に活動に参加できることを目標に、演じるオペレッタのストーリーを子どもたちと一緒に作り上げることにした。

園生活でこれまで経験してきたことを踏まえ、今回は5歳児の子ども劇場に向けてのねらいを以下のように設定した。

- ・自分で決定した役に最後まで取り組み、話し合いで意見を述べたり、友だちの意見を聞いて考えたり、必要な道具を作ったりする。
- ・ただ楽しむだけでなく、観客がいることを意識して、舞台上上がる。  
(適した声の大きさや歌う姿勢などを考えて行う。)
- ・劇の流れを理解して、保育者の援助ばかりでなく子どもたち同士で声をかけ合ったり教え合ったりして進行していく。

## 2. ストーリー作りの様子

11月半ば頃から5歳児学年あお組、みどり組合同でストーリー作りを始めた。子どもたちはストーリー作りを行うのは初めてではない。子ども劇場のオペレッタはオリジナルのストーリーで行いたいという保育者の願いがあり、4月から保育中に「お話作り」を何度も行ってきた。テーマは決めず、1回で完結するような短いお話作りではあったが、子どもたちはお話作りの面白さを知っているため、子どもたち自身からも子ども劇場はオリジナルのストーリーでやりたいという意見が出された。

まず初めに登場人物の人数を話し合った。2年間、5歳児学年のオペレッタを見てきて憧れを抱いている子どもたちの中には、演じる内容だけでなく観劇をする立場も意識できる子どもも複数おり、全体に意見を投げかける姿があった。計61名の5歳児がホールの舞台上上がりオペレッタを披露するのであれば、いったいどれだけの人数で役を演じるとホールを埋め尽くす観客に歌が届くのか、舞台上に一人で並べる人数はどれほどか、などということ話し合

ううち、1役10～14人程度が妥当であり、登場人物は5役にしようということとなった。

次に、ストーリーの舞台はどこがいいか、どんな登場人物にするかという話し合いが行われた。これは色々な意見が出たが、実際5歳児皆がイメージしやすいものがよいだらうということとなり、4月から5歳児の保育活動内（かっこ内に記したもの）で経験してきたものを登場させることとなった。

- <登場人物>
- ・博士（様々な実験を楽しんできた「ふしぎ実験室」）
  - ・アドベンチャーキッズ  
（冒険をテーマにした園外保育の経験、自分たち自身の呼称）
  - ・魔法使い（ハロウィーンの仮装パーティー）
  - ・海賊（運動会のリズム表現）
  - ・ハワイアン（運動会のリズム表現）

自分たちの経験のあるものであるからイメージしやすいため、登場人物が決まった時点から「僕は絶対海賊！！」などとやりたい役を心に決めていた子どもがいた。登場人物が決まるとすぐに、舞台は「ハワイ諸島」ということに決まった。

ストーリー作りの話し合い活動において、その参加姿勢は個々様々であった。（事例1～4）できる限り全員で作り上げたストーリーであるという意識を持ってほしいという願いから、活動後に伝えられたアイデアを次回の活動で紹介したり、たくさん挙げられたストーリー展開の案から自分はどれが一番面白い展開だと思うかを拍手で決めるなど、ささやかではあるが皆が自分の考えを示す場を毎回設けるようにした。また、集中が途切れないように1回の話し合い活動の時間を長くても15分以内に心がけた。

### 【事例1】意見を多く述べるA男

頭の回転が速く、次から次へとイメージがわくため、ストーリー作りでは何度も挙手をする姿が見られた。また、いくつかのアイデアから1つを選び出す場面では、「絶対に〇〇だ！」と自分の意思を声に出す姿もみられた。ただ気持ちが盛り上がっているだけでなく、その行動の理由のひとつとして、アイデアマンで行動的な本児は周囲の男児から憧れられている存在であり、本児の意見に流されてしまう友だちがいることをわかっているからという理由もあるようだった。

中には本児と同じ意見にすることで満足感を味わう子どももいたが、本児と同じ意見にしないでほしいと思ったり、自分の意見を下げってしまう子どももいたので、本児の興奮する気持ちを受け止めながらも「言葉には出さないで拍手で答えてね」など全体に伝え、周囲の子どもが惑わされないように心がけた。

### 【事例2】みんなの前では発表しないB子

ストーリー作りの活動には集中して参加し、話の展開もよく理解していたが、集団の中

では挙手をしてアイデアを発表することはなかった。周囲の意見を聞いて、どの展開が面白そうかを考えているようだった。

ストーリー作りが中盤になった頃、話し合い活動のあとに保育者の所へ1人でやってきて「次は畏があるっていうのはどうかな?」と自分のアイデアを伝えてきた。「いい考えだね!楽しそう」と本児の意欲を認め、集団の前で発表することに緊張してしまう本児であったので、次の話し合いの時に保育者から「こんなアイデアがあった」と全体に伝え、話し合いを進めた。

### 【事例3】集中の続かないC男

集団行動が得意ではない本児は、話し合いの活動などにあまり興味を示さず、床に寝転がったり、空想を楽しんだりする姿が見られた。

本児が話し合いの輪に入れるように、本児が落ち着いて話を聞くことのできる場所に席を設け、活動に参加させた。少しずつストーリーができ始め、また何度も繰り返し出来上がったストーリーの内容を振り返ることで、本児の中にもイメージができはじめ、アイデアが浮かび挙手をする姿が見られるようになった。

保育者もその積極的な姿を受け止め、できるかぎり本児がアイデアを発表できる機会を設けた。自分のアイデアが反映される喜びや、それに対する周囲の反応などに面白さを感じたようで、ストーリー作り初期に比べると活動に対する興味関心は深まったように感じたが、長時間の集中は難しく、後半は話を聞いていなかったり、関係のない発言をすることもあった。

### 【事例4】初めからなりたい役が決まっていたD男

ストーリー作りの前に登場人物を決めたため、どんな内容なのか決まっていない段階から「海賊をやる!」と盛り上がっていた。好きな遊びでは毎日のように海賊の剣を作っていた。ストーリー作りが始まるとすぐに世界に入り込み、挙手を忘れてアイデアを発表する姿も見られた。また、近くにいる友だちが呟いた意見でも面白いと思ったものは自分の意見かのように積極的に発言していた。

自分は海賊役だと心に決めていたため、海賊にとって不利なアイデアが出たときは「そんなのずるいよ!」とむきになって怒る姿も見られた。

事例のように様々な参加の仕方が見られたが、約1ヶ月の時間をかけてストーリーを作り上げることができた。完成したストーリーの内容を次に紹介する。

〈平成19年度5歳児学年の子どもたちが作り上げたストーリーの概要〉

世界一の宝物がハワイ諸島のコワイ島に隠されているという伝説を聞き、博士とアドベンチャーキッズ、魔法使いと海賊がそれぞれ宝を求めてコワイ島へ向かう。

一方、伝説の宝はコワイ島に住むハワイアンによって守られており、宝を手に入れるためにはハワイアンの仕掛けた数々の罠を乗り越えなければならなかった。初めは敵対する4役であったが、難関を乗り越えていくうちに互いの力を認め合い、最後の罠は4役で力を合わせることで乗り越えることができた。ハワイアンからも互いを信じ助け合う心を認められ、伝説の宝を授かることができるのだが、本当の世界一の宝は伝説の宝ではなく、困った時にはいつでも助け合える、離れていても心はつながっているオハナ（ハワイ語で「家族」「大切な仲間」という意味）であり、この冒険で彼らはそれを手に入れることができたのである。

### 3. ストーリー完成後の子どもたちの様子

ストーリー作りを通して、子どもたちはそれぞれの役のイメージを膨らませ、役に愛着を持っていった。よりイメージしやすくするため、どのようなキャラクターを頭の中で思い描いているのか、不特定多数の子どもたちに自由に絵に描いてもらった。眼鏡をかけ白衣を着た博士、青色の服をまとった海賊、マントを身につけた魔法使いなど、具体的に描かれた。また、ハワイ諸島からイメージしたヤシの木を描く子どももいた。これらの絵を利用し、保育者でこの物語の紙芝居を作成した。頭の中だけの個々のイメージが目に見える形になったことで、キャラクターだけでなく、物語の場面や背景のイメージも鮮明になった。子どもたちはこの紙芝居をとっても気に入っていたため、自由に手にとって見られるようにしたところ、自分たちで繰り返し見たり読み聞かせたりする姿が見られた。また、海賊の剣を作って戦いごっこをしたり、博士の眼鏡を作ってかけ博士のような口調で振舞ったりと、それぞれの役になりきって遊ぶ姿が多数見られた。そういった遊びの中でより様々なイメージが広がっていき、衣装を着たい、道具を作りたいといった声も子どもたちから聞かれるようになった。

### 4. 役決めの様子

実際にオペレッタの練習を始めるにあたって役決めを行った。子どもたち自身で考えたストーリーだったこと、紙芝居でイメージをより具体化したこともあり、それぞれが役のイメージをしっかりと持っており、既に「○○役をやりたい」と決めている子どもや「どれも好きだから迷っちゃう」と悩む子どもなどが見られた。

役決めの際に保育者が配慮した点は以下のようなことである。

#### (1) 歌の紹介

子どもたちはストーリーは理解しているが、演じるのはオペレッタであり、どのような歌や音楽でストーリーが展開されていくのかが重要になる。そのため、オペレッタで使用する全ての歌及び、何役がどの歌を歌うかということも事前に紹介しておいた。尚、曲及び歌詞は全て保育者が決めたものだが、それぞれの場面のイメージに合う曲を選ぶよう配慮した。また、オ

オペレッタで使用する曲数が多いため、子どもたちが覚えやすい曲や知っている曲を使用することで親しみやすくし、覚える負担を軽減させられるよう配慮した。歌詞も、ストーリーをわかりやすく伝えられるような内容にし、子どもたちが好きな言葉を入れるなどの配慮をして作成した。

## (2) 役の特徴説明

役のイメージをより深め、どの役をやりたいかを考えやすくするために事前にそれぞれの役の特徴を細かく説明した。こうしたことで、役決め後に「思っていた役とは違った」と言う子どもはほとんどいなかった。また、自分で役を選ぶことで、その役に責任をもって最後まで取り組めることを期待した。

## (3) 役の固定

この学年の子どもたちが過去に経験した2回の子ども劇場では、本番が近づくまで役は固定せず好きな役を自由に選択して楽しむという方法で活動を進めてきた。しかし、今回のオペレッタは曲数が多くそれぞれの動きが複雑なため、役毎で話し合ったり繰り返し練習したりできるよう1月中旬には役を固定することにした。

## (4) 役決めの期間

役決めに関してはじっくりと子どもが役を選択できるよう、数日の期間を設けて役の希望をとった。その期間中は希望の変更も随時受け付けた。しかし、ひとつの役におけるおおよその適当な人数を事前に子どもたちと話し合いで決めていたため、役によって人数に大きな偏りが生じた場合に備えて希望は第2希望までとることとした。その際、必ずしも全員が第1希望の役になれるとは限らないことも伝えておいた。そのため、他の子どもの希望状況を見て、「やっぱり違う役にする」と確実になれそうな役を選ぶ子どもも見られた。

## (5) 役の人数調整

全員の希望をとり終えたら、すぐに保育者間で人数の確認及び調整を行った。人数の多い役から少ない役への移動が基本だが、第1希望の役への思い入れが強く、その役以外では活動に対する意欲が著しく軽減してしまうだろうと思われる子どもの変更は避けた。また、第1希望ではないが、この子どもは特定の親しい子どもと同じ役の方がのびのび演じることができると思われた場合も、変更の対象とした。このように、子どもの交友関係や取り組みやすさ等を配慮した上で、個々に変更の相談をした。変更するかどうかは本人の意思に任せため、もとの希望を通す子どももいれば保育者の話を聞いて「やっぱり変えようかな」と変更する子どももいた。中には、人数が足りないからと率先して役の変更を受け入れる子どももいた。このように時間をかけて希望をとっていったことで、誰が何の役になろうとしているのか、どの役が人

気があるのかなど、周囲の様子にも興味を持つ子どもの姿が多く見られた。また、希望をとった後できるだけ早く役を決定したことで、役決めに対する興味関心が最も高い状態で役の発表を行うことができた。

#### 【事例5】役の変更を快く引き受けたE男

第1希望に選んだ役の人气が高く、第2希望に選んでいた役の人数が足りないということを保育者から相談を持ちかけた。保育者に「第2希望はどう？」と尋ねられ、一瞬迷った表情を見せたが、本番後には他の役も自由に出来るということを確認し、快く引き受けた。保育者に礼を言われ、「こっちの役もやりたかったからいいよ」と笑顔で答えた。

#### 【事例6】悩んだ末、役の変更を引き受けたF子

初めは最も希望人数の多い役を選んでいて、この役を選んだ女兒が本児1名だったということもあり、仲の良い友だちのいる他の役の方が良いのではないかと考え、役の変更の相談を持ちかけた。しかし、本児のこの役に対する意欲は高く、変わるとしても第2希望の博士（この役も男児のみ）がいいと訴えた。第1希望の海賊役のメンバー等を考慮し、本児には博士に変更するのはどうかと再度相談したところ、悩んだ末快く引き受けた。その際、事例5のE男同様、本番後には他の役も自由に出来ることを伝えた。

#### 【事例7】仲の良い友だちと同じ役になることを優先させたG男

本児は歌や踊りなどの活動に対して、恥ずかしさから抵抗を感じていた。今回は本児にとって比較的イメージのしやすい「海賊」という役があったため、すぐにこの役に興味を示した。しかし、役の人数調整のため本児にも役変更の相談をした際、本児が特に慕っていたH男がどの役になるかを真っ先に尋ねに行く姿が見られた。H男の役が自分と同じであることを確認した本児は、「他の役は嫌だなあ」と役の変更を拒んだ。しかし、「それではH男にも相談してみようかな」と保育者が言うと、保育者が相談に行く前に、G男自らH男に絶対に役を変更しないかどうかを確認しに行った。

#### 【事例8】衣装を見て役を決めたI子

各役の特徴等を紹介していた段階で、魔法使い役の衣装を見て「かわいい！絶対に魔法使いにする！」と断言していた。希望をとっている時も「絶対に魔法使いがいい」と強い希望を持っていた。しかし、役が決まり活動が進むにつれ、「衣装は魔法使いがいいけれど、歌は全部ハワイアンのが好きなんだ」とハワイアン役への気持ちが強まったが、「本番が終わったらハワイアン役をやるんだ！」と本番までは魔法使い役をやり遂げる意思を見せた。

事例5～8のように様々なとらえ方をする様子が見られたが、個々の様子に合わせて保育者

がかかわり、一人ひとりが納得して活動に参加できるように配慮した。

## 5. 本番に向けての活動の様子

大まかな活動の流れは以下の通りである。

### (1) 各役の歌の確認及び振り決め

まず初めに、役ごとに歌の振りを考え、それと同時に歌を覚えるようにした。積極的に振り付けのアイデアを出す子どももいれば、友だちの意見を聞いて賛否を示す子どももいた。曲数が多いため途中で集中が途切れないよう1回の活動での振り決めは1～2曲に留め、なるべく時間はかけずにテンポよく決定していけるよう配慮した。自分の役の歌に振りがつけられたことを喜び、話し合いの時間以外でも振りの確認をしたり楽しそうに踊ったりする姿が見られた。また、オペレッタの曲をピアノで弾くとほとんどの子どもが自然に歌ったり踊ったりして楽しんでいった。

### (2) 各役舞台上での動き練習

振りの完成後は、役毎に舞台での動き練習を行った。ストーリー作りや紙芝居を通して話の流れはほとんど把握していたため、そのイメージをすぐに再現できるよう本番に近いナレーターとピアノ伴奏で練習を進めた。実験やゲームなどの細かい内容は後にし、まずは活動しながら歌の立ち位置を確認したり舞台や舞台裏を使つての移動の仕方を確認したりした。

### (3) 複数の役での動き練習

ある程度役毎の動きを理解したら、絡みのある役同士と一緒に動く練習も行った。徐々に役を増やしていくことで、他の役の動きも理解し、どのタイミングで自分が動けばいいのか、どうしたら狭い舞台の上でうまく動くことができるかなどを具体的に試行錯誤していけるようになっていった。それぞれの動きを覚えた頃を見計らって、役の見せ場でもあるゲームや実験など、役毎にポイントをしぼった部分練習を行った。舞台練習以外でも話し合いの時間を設けるなどして、よりよく演じるための方法を役毎で相談したり練習したりした。

### (4) 全体練習

(1)～(3)の集大成として全役での通し練習を行った。また並行して、役ごとまたは他の役と協力して小道具や大道具の製作も進めていった。

ある程度オペレッタの形が出来上がった頃、子どもたちの舞台上での姿をビデオに録画した。子どもたちからも要望があり、翌日にその上映会を行った。上映会では自分たちの姿を見て楽しんでだったが、見終わった後に感想などを発表する場を設けると、「こうした方がもっと良い」



「あそこはおかしい」など、多数の改善点が子どもたちから挙げられた。

**【事例 9】 活動を通して自分の役に愛着を持っていった F 子（前出【事例 6】）**

事例 6 でとり上げた F 子は、本児が一番に希望する役につくことはできなかった。初めは、「今度海賊もできるんだよね？」と、最もやりたかった役の子どもたちの姿を見てうらやましそうにする姿が見られた。しかし、もともと歌や踊りが大好きだったこと、積極的にアイデアを提案する性格だったこともあり、本番に向けての活動では意欲的に参加することができた。また、衣装の小道具作りや実験（博士役の見せ場となる場面）などを通して、より一層この役に対して魅力を感じるようになり、イキイキと演じることができた。

**【事例 10】 やりたい役を最後まで楽しんだ J 子**

役決めの際、ひとつの役に強くこだわった J 子は、本番まで集中し楽しんで活動に参加する姿が見られた。控えめな性格のため、気の合う友だちが一緒であれば積極的に行動することができたが、どちらかという人前で発表したり意見を言ったりすることはあまり得意ではなかった。しかし今回の活動においては、普段一緒に過ごす仲の良い友だちが同じ役にいなかったにもかかわらず、舞台上で自分から動こうとする姿や集中して小道具製作に取り組む姿が見られた。

**【事例 11】 オベレッタが苦手だった K 男**

過去 2 回の子ども劇場において、舞台上に立つことにさえ抵抗を感じ嫌がっていた K 男。今回の子ども劇場では役決めの段階から「絶対に博士がやりたい」と意欲を見せていた。振り決めでは積極的にアイデアを出す方ではなかったが、友だちの意見によく耳を傾け共感する姿が見られた。役毎によるポイントを絞った部分練習ではいろいろと試行錯誤し、よりよい方法を一生懸命考えていた。

3 歳児学年、4 歳児学年の子ども劇場オベレッタでは本番の直前になるまで役の固定はせずその都度なりたい役を楽しむ経験をしてきているため、中には今回の活動の途中で他の役にも憧れを抱く子どももいたが、本番を迎えるまで役ごとに話し合いをして振りや動きを子どもたちで決定していったり、共に大道具製作をしたり、自分だけの小道具、専用の衣装を得ることで全員が自分で決定した役割を子ども劇場当日まで意欲的にやり遂げることができた。2 学期の「お店屋さんごっこ」で自分の決めた役割を変更することなく最後までやり遂げる経験をしていたのも、最後まで取り組もうとする意欲につながっていたのではないだろうか。

## 6. 当日の様子

### 【事例 12】子ども主体のオペレッタ運営①

ハワイアン役は、ストーリー展開上様々な罫を仕掛けるため、舞台背景の裏に隠されている「洞穴」「滝（2本）」を取り出し、定位置に移動させ準備をするという動作があった。ハワイアン役と保育者で話し合い洞穴の担当者、滝の担当者に分かれ大道具を移動させることにしたが、初めは大道具を取り出す際背景の布に大道具がひっかかり背景がはがれてしまったり、勢いよく取り出しすぎて舞台から落ちそうになるなど混乱していたが、舞台練習を重ねるうち、ただ「洞穴」「滝」という名目だけで動くのではなく、自主的に背景の布を持ち上げて大道具を取り出しやすくしたり、どの部位を持ち、どのタイミングで動かせば混乱することなく移動することができるのかということ把握し、互いに声を掛け合ったり、それぞれの役割を意識して保育者の援助もなく大道具の移動をこなすようになっていった。本番でも、ハワイアン役全員で声を掛け合いながらスムーズに移動させることができた。また、ハワイアン役へ初めに伝えた保育者の指示は、自分が担当する大道具の移動ができたら役の定位置に戻るといったことだった。しかし、自然に全員が大道具の準備は完璧にできているのか確認をしてから定位置に並ぶようになり、「自分の担当」をやり遂げるだけでなく大道具準備全般をオペレッタに欠かせない自分たちの役割であると認識し自主的に行動をしているのだと感じることができた。

### 【事例 13】子ども主体のオペレッタ運営②

オペレッタのクライマックス、4枚の鉄の扉を皆で力をあわせて倒壊し、世界一の宝物を見つけ出すシーンでは、博士、アドベンチャーキッズ、海賊、魔法使いのそれぞれの役が空気砲を使って1枚ずつ扉を倒していくことになっていた。

11～14人で囲むことのできる大きな空気砲は一緒に叩く子どもたちとタイミングを合わせないと扉を倒すほどの空気が穴から出ない。初めのうちは叩くことに夢中でタイミングが合わず、なかなか倒すことができなかった。「1, 2, 3, 4, …」と皆で掛け声をしながらタイミングを合わせるようにして扉を倒せるようになると、徐々に自分たちの倒す扉だけではなく他の役の子どもの様子にも目を向けるようになった。自然と「がんばれ!」「あと少し!」などという応援の声が上がるようになった。本番が近いある日、ある役の扉がどんなに頑張ってもなかなか倒れなかった時、応援していた他の役の数名が扉を倒す手伝いに自然と体が動いたことがあった。体が勝手に動いてしまったようで、子どもたちの方から手伝ってもいいのかという問いかけがあり、その素直な気持ちを受け止めた。また、力が入りすぎてタイミングが合わなくなってしまうたり、空気砲がずれて扉に空気が当たらなくなってしまったりすると子どもたちからナレーションをしている保育者に対し「先生、ちょっと待って!」「もう一回!」などとストーリーの流れを滞らせてしまってもどうにか扉を倒したいという強い気持ちが伝わってくるような言葉が上がるよう

になった。保育者の指示を待ったり、保育者が合図をしたりするのではなく、ストーリーの全容を把握し、自分たちでオペレッタを進めていこうとする姿が見られた。

### Ⅲ章. 5 歳児の実践についての考察

子ども劇場の活動は当日で終わったわけではない。子どもたちの希望もあり、役を変えて5歳児学年全員でオペレッタの再演を行った。人数調整などはせず、全員がその時になりたい役を選んだ。多くの子どもたちはこれまでとは違う役を選んでしたが、中には自分の役に愛着を持ち役を変えずに再演を楽しむ子どもも少なくなかった。【事例6】と【事例9】に挙げたF子は、当日までの活動で自分の役に愛着と誇りを持ったようでその後何度オペレッタの再演をしても決してその役を変えることはなかった。また、5歳児の姿に憧れ、自分たちもやってみようという3歳児、4歳児のために「子ども劇場ごっこ」と称したコーナーを設け5歳児のように舞台上立ってオペレッタに参加できる機会を何度も設けた。5歳児は、一緒に舞台上立って動きをリードしたり、舞台の下で全ての歌の振りの手本になったりするなど、自主的に3歳児、4歳児を引っ張っていく姿が見られた。【事例2】で挙げたB子は、オペレッタの歌、振りを完璧に覚えており、これまでの活動を通してそれを発表する自信を持ったのであろう、率先して振りの手本役を買って出ている。

子どもたちは、自分たちで一から作り上げたこのストーリーを本当に好んでいた。内容だけでなく曲も、歌詞も、振りも、動きも全てを好んでいた。誰一人として「やりたくない」という子どもがいなかった。子どもたちは自分自身の役の動きを把握するだけでなく、他の役の歌や振り、動き、そして誰がどんな役割をこなしていたのかということも把握していた。どうしたらよりスムーズにオペレッタを進行できるか、どうしたらより観客に楽しんでもらえるのか保育者が投げかけるだけではなく子どもたち自身が考え、子どもたち同士で声を掛け合っていた。保育者に指示され動くのではなく、自分たちで考え、先の見通しを持って活動に取り組むことができるようになっていたのである。子どもたちがここまで意欲、意識を持って取り組むことができたのは、決して子ども劇場へ向けての活動でそれを身に付けたからだけではない。3歳児学年の1年間で得た園生活への安堵感、4歳児学年で学び得た友だちと活動することの楽しさ、そして5歳児学年で得た自分たちで作り出すことの面白さ、互いに認め合える喜び、この3年間で経験してきた様々なことの積み重ねが全ての自信となって表れているのだと思う。

何の土台もない状態でのストーリー作りは、どのような展開になるのか、果たしてオペレッタとして成り立つ内容になるのか先が見通せず、保育者としては大きな不安もあり、子どもたちからアイデアが出なかった場合の対処も考えておいた。子どもたちもストーリー作りの活動が始まったばかりの頃は、保育者と同じようにイメージが持てず困惑していたと思う。しかし、いざ活動が始まってみると子どもたちからはアイデアがどんどん湧き上がってきた。保

育者の思いつかないようなユニークなアイデアも多くあげられた。子どもたちのアイデアを保育者がまとめ、少しずつストーリーができ始め、保育者と子どもたちの間で共通のイメージができ始めるにつれ一体感が生まれるのがわかった。それは活動を通して、誰もが不安から期待へ感情が変化し、気持ちの高まりが共鳴していたからだと思う。

自分たちの作ったストーリーがオペレッタという形になっていくにつれ、子どもたちの参加意欲も高まっていったが、ストーリー作りを始めてから当日まで約3ヶ月という長い活動となり、子どもたちの意欲、興味関心を損ねないよう心がけたことも多い。全てを子どもに委ねるのは子どもにとっても負担となってしまう。また、保育中のすべての時間を子ども劇場の活動に費やしてしまうのも子どもたちの意欲を失わせてしまいかねない。子どもたちのイメージを壊さず、できるかぎり再現するという事は簡単なことではないが、再現できるように保育者が土台を用意することで、子どもたちのイメージを膨らませたり新しいアイデアを生み出したりする刺激となった。今回、ストーリーの内容的にもそうだったのだが、大道具の出し入れのほとんどを子どもたちに任せた。また、子どもたちから出るアイデアを出来る限り反映した。そのことがより効果を発揮したのだと思う。また、活動への取り組み方は個々様々であり、遅れてしまう子ども、集中が続かない子どもなど様々なレベルの子どもがいる中で、全員で楽しめる雰囲気を作ったり、全員が「仲間」であるという意識が持てるように常に心がけた。

子どもたちの取り組み方、オペレッタへのかかわり方を見て、改めて子どもたちにとってこれまでの活動は「行事に向けての活動」ではなく、「生活の一部」であるのだと考えさせられた。意見の発表、大道具、小道具の準備、自分の思いが通らなかった時の気持ちの切り替え、歌の歌い方、友だちへの声かけ、様々な場面でこれまでの子どもたちの経験がうかがえた。一から築きあげるといっては不安も大きいですが、子どもたちの発想力は保育者の想像をはるかに超え、決して保育者主導でなくても作り上げることができるのである。決して年長組の子ども劇場に向けて常日頃保育をしているわけではないが、自分たちで築き上げていくことができるようになった5歳児という時代をより生き生きと自分を表現していけるために、保育者は園生活の中で日々の経験や刺激を充実させていったり、子どもたちの日常から拾い上げて保育に展開していくことが大切だと思う。そして、保育者はプロデューサーのように子どもたちのアイデアのまとめ役となり、子どもたちと一緒に作り上げていく活動は本当に楽しいものだった。

卒園後、父親の仕事の都合で青森県へ転居することになった子どもがいる。大好きな友だちと同じ小学校へ通うことを楽しみにしていたため、転居が決まった時は大泣きをした。しかし、子ども劇場の活動を積み重ねていくうち、慣れ親しんだ地を離れることにナーバスになっていた母親に対し、笑顔で「大丈夫だよ。離れていても心は一つ。みんなオハナだよ」と励ますようになったという。この言葉はオペレッタの歌詞の一部であり、オペレッタのテーマともなったものでもある。ただ活動を楽しむだけでなく、そこに込められたメッセージも子どもたちの心の中にしっかり根付いているのだと感じた。

(坂本 絵梨子、入江 沙耶佳)

## IV章. 実践のまとめ

今回の研究では、本園で長い歴史のある子ども劇場について、保育者間で「子どもの主体性を大切にす」という共通の視点を持ちながら、取り組み方の見直しを行った。3学年それぞれが具体的に実践例を挙げながら変化の見られたところを述べてきたが、以下に各学年の研究結果を再度まとめて述べることにする。

### 1. 3歳児学年の実践から

初めての集団生活である3歳児学年において大切なことは、まず保育者との信頼関係を築くことである。子どもは園でありのままの自分を出し、それを受け止めてもらえるという安心感の中で、初めて自由に自分を表現することができるのである。子どもの中には、音を聞いただけで自然に体が動き出して自由に表現する子もいれば、周囲の様子を伺うだけで精一杯の子もいる。

まずは多様な子どもの姿を認めることが第一歩である。さらに普段の生活の中で子どもの興味や関心のあることを保育者がキャッチし、それを決して無理をすることなく表現活動に取り込んでいく。繰り返し楽しい雰囲気で行うことで、子どもは少しずつ自分の行動に自信を持って参加するようになる。

3歳児は集団生活を送る中で、徐々に自分だけでなく他者の存在を意識し、段階を追って友だちと共に活動することに喜びを感じるようになる。このように3歳児学年にとっては、表現活動をしながらかけて1年間をかけて人間関係を構築しているのではないかと考える。

### 2. 4歳児学年の実践から

今回の実践例で、前年度までの取り組み方と最も変化が大きかったのは4歳児学年である。それまでは、年度初めに「年間テーマ」を学年担当保育者があらかじめ決めておき、テーマの方向に合わせて保育者主導で活動を進めていく方法が取られていた。それを、時間をかけて子どもの興味や関心のあることを保育者が拾い出し、さらに生活体験してきた身近なことを活かして子どもと共に作り上げていくとの方法へ切り替えたのである。

子どもと共に作る過程では、本園の「チーム保育体制」が最大限に活かされたと言えよう。つまり4歳児学年2クラス計62名の子どもに対して、3名の保育者が保育を担当していることを活かし、時には2クラス合同活動を行ったり、時にはオペレッタに登場する3つの役ごとに3箇所に分かれて歌詞に合わせた振り決めを行ってみたいりする、などの工夫が試みられた。最終的にオペレッタは、クラス単位で舞台発表するのだが、途中過程では2クラスを解体し、子どもが毎回3役から自由に選択できるように活動を進めていったのは新しい方法であった。子どもにとってもいろいろな役を試すことで自分なりの納得がいく、気の合う友だちと共に役を選択することができるなど、全く負担感がない形だったと思われる。

最終的に「子ども主体」が一貫した活動は、子どもたちに意欲が芽生え、それぞれの子どもなりに様々な形で表現を楽しむことができたと言える。またそれだけでなく、子ども劇場の活動が普段の保育から突出しないものであり、その中で友だちと共感しながら行う楽しさや充実感、達成感を体験できたことは集団としての成長に繋がるものであったと思われる。

### 3. 5歳児学年の実践から

平成19年度の5歳児学年は4歳児学年同様、年度初めに「年間テーマ」を決めて保育者主導で活動を進めていくことはせず、子どもたちの話し合いで出される意見を重視して作品を作り上げるチャレンジをした。5歳児は在籍の61名全員が4歳児学年の時に子ども劇場を経験しており、その際に自分たちのオペレッタだけでなく、1学年上の子どもたちのオペレッタを見たり、行事終了後は「ごっこ遊び」として舞台に参加させてもらったりしている。その経験からも、子ども劇場への関心や個々の意識はかなり高かったと言える。さらに1学期から新たに取り組んだ「お話作り」の楽しさを体験したことが加わり、子どもたち自身から「オリジナルのストーリーで」との希望が出されている。その他登場人物の役数から内容まで2クラス合同での話し合いの場を設けて、意見をまとめている。

5歳児の子どもたちにとって、「自分たちで考えた」「自分たちで力を合わせて作っている」と意識を持ち、実際の行動を積み重ねていくことは得がたい体験である。登場人物はそれまでの保育に関連したものであったため、子どもたちにとってどれも親しみやすい役ではあった。しかしながら個人差があるとは言え、61名が共通のイメージを持ち、自分たちの考えを出し合いながら最後までオペレッタを作り上げたのは、一言に「行事に参加する」ことに留まらない深い意味があると思われる。3年間の園生活で培った様々な経験と人間関係の深まりや信頼感が持てるようになってきているからこそ、子どもたちの自信が表れていた。そこに育ったものは保育者が想像していた以上だったと言える。

子どもたちは自分たちの力を発揮して、主体的に生活していくことが出来る。今回新しい取り組みを試みたことにより、保育者がそれを強く実感することができたのである。

## V章. 幼児期における表現活動の意味

これまで、学年毎の実践例からそれぞれの考察を述べたが、最後に全体としての研究の結果をまとめたい。

一般的に幼稚園のカリキュラムの中で、「表現活動」を取り上げてみると、ねらいとは「のびのびと体を使って表現する」や、「それぞれの思いを自由に表現する」などが挙げられることが多い。確かに「身体表現」や「絵画表現」など活動そのものの望ましいあり方としてはその通りである。しかし実際に子どもがねらい通りにできるのかどうかは、活動内容やその展開の工夫以上に大切なものがある。それは、日頃の園生活が子どもにとって安定したものである

のか、また充実しているかどうかが問われるのである。

園生活初年度である3歳児学年では、子どもが「園は安心して自分を出せる場」と感じるところから始まり、自分の行動に自信を持てるようになり、初めて表現の楽しさを知り、他者とともに表現することの喜びを感じたりする。このような1年間かけて育った気持ちや人間関係の構築は、4歳児学年にも繋がっていく。

4歳児学年では、子どもは園生活の中で「自分でできること」を増やし、友だち関係も広がっていく。園では日頃の遊びが充実できるように環境等配慮することにより、子どもは新しい体験を増やししながら、自分で自由に選択したり、友だちと一緒に活動する楽しさを感じたりしながらさらに学んでいく。「表現活動」も突出することなく、この延長線上にあるのだと思われる。

5歳児学年は、このような2年間の経験が十分な土台を作った上での最後の1年である。

「こうしてみたい」、「こうしたらもっと楽しくできるのではないか」など自分なりの意見を持ち、人に伝えていくこともできるようになる。つまり自発的に考える、人と上手くかかわるためにはどのようにすべきなのかを身に付ける、などそれらが「自分たちの生活を自分たちで作り上げていく」ことに繋がっているのだと考える。

また、3年間の園生活の中でここまで達成できるのは、単に自然な流れだけではない。子どもが自分自身で考えて行動できる環境を用意し、人とのかかわりの中で困難にぶつかっても自分で解決できるように方向を示すなど、園全体で保育者全員が一貫性をもって保育に臨むことが重要なのである。常にどのような場面でも、保育者の指示を聞いて行動することが当然となっている保育の中では、子どもは自分の考えを自分の言葉で伝えるようには育たないのではないだろうか。

本園の子ども劇場への取り組みは、かなり古くから「子どもが楽しく取り組める」ことをねらいの柱として行われてきた。しかし「生きる力の基礎を培う」ことを基盤に、子どもの主体性を大切にしたい表現活動の取り組み方を見直した今回の実践は、本園の保育者にとっても今後の方向性を改めて確認する機会になったと言える。つまり、表現活動は「楽しく取り組める」ことだけに留まらず、子どもに何を育てていくべきかが今回の試みを行うことにより真の意味で実感できたからである。保育者は、毎日子どもと向き合っていると、日々保育の方法論にのみ眼がいきがちであるが、それだけでなく子どもの育ちを質的に理解していく重要性に気付くことができたのである。

今回の研究は、3学年全てがそれぞれの表現活動を行う中で新たな取り組みも行い、学年にあった特徴的な事例を挙げながら子どもに育つものは何かを時間をかけて考えてきた。園の保育者全員がこの研究に取り組んだことにより、3年間の発達段階を踏まえた上で子どもの育ちを再度理解する重要な機会を得られたと考える。今後もより良い表現活動を実践していきたい。

(益田 薫子)

## Ⅵ章. 終わりに

「子ども劇場」のオペレッタのクライマックスは、いつも感動的である。子どもたちが一人ひとり輝いているからである。本園が長い歴史の中で作り上げた価値ある表現活動である。

年少組のオペレッタは、日常の保育の中から子どもたちが一番楽しかったおもしろかった保育内容から保育者が作り出す。年中組のオペレッタになると、子どもたちの日常の具体的な活動がベースになり保育者といっしょに作り出す。多様で活発になった仲間同志が共感し、共有するモチーフから生まれてくる。

年長組のオペレッタになると、子どもたちの劇づくりは、その過程でなんども試行錯誤する。共通の課題をもち、一緒に考え、今までの経験や体験をもとに話の筋道を創り、紙芝居(絵コンテ)を作りつつ劇づくりが具現化していく。仲間がいることで学んだ協力すること、責任を持つこと、相手を思いやり仲良くすること、クラスで起こった問題を一緒に考えて解決したことなど、日常の保育で育んだ社会性も劇づくりの大きな要素となる。また、自分の意見がみんなに認められたり、友だちが提案したアイデアに共感したり、そんな過程をとおして仲間として自分たちで考えたと言う有能感に浸り、仲間意識が高まるのである。これは、この時期に子どもらに味合わせたい貴重な体験である。

こう考えてくると保育者の役割が重要である。保育者の「劇づくり」をとおして何を育てたいか明確でなければならない。子ども主体の指導過程を作るために研究実践を重ねることでいっそう保育者側に見通しと系統性をもった指導ができる。

文京幼稚園における表現活動の実践をまとめるに当たり、表現活動を展開するためには、どんな保育が望ましいか目指す視点をもつことができた。

- ①「子ども主体の意味」「一人ひとりが主役とは」「自分の思いを表現するには」この視点に立ち一人ひとりを生かす表現活動の指導のあり方の方向性を見つけることができた。
- ②オペレッタ形式の劇づくりを成立させるには、「楽しさや喜びを感じる日々の保育」「話す、歌う、踊る、身体表現などの活動」「自分の思いを素直に出せる場」が保障されていることが大切である。
- ③立ち振る舞い、座る、立つ、歩く、走る、バランス感覚などの動きを身につけたり、動きをよくしたり数多くの感覚を育てることが大切である。

さらに保育者には、指導力はもちろん一人ひとりの子どもにより添える愛情に満ちた人間性が求められる。「保育が楽しい、保育がおもしろい」と子どもたちといきいきと遊び学ぶ保育者でありたいと願ってやまない。

最後に、今回の実践研究をまとめるに当たり、具体的なお助言・ご指導をいただいた文京学院大学人間学部保育学科 梶島 香代教授には、深く感謝いたしますとともに厚くお礼申し上げます。

(園長 宮内 太一)

(2009.10.5 受稿, 2009.11.5 受理)